

ゴマサバ (東シナ海系群) ①



■ゴマサバ東シナ海系群の現在の状況

ゴマサバは北太平洋に広く生息しており、本系群はこのうち東シナ海～日本海に分布する群である。

図1 分布図

産卵場は東シナ海中南部と薩南海域。

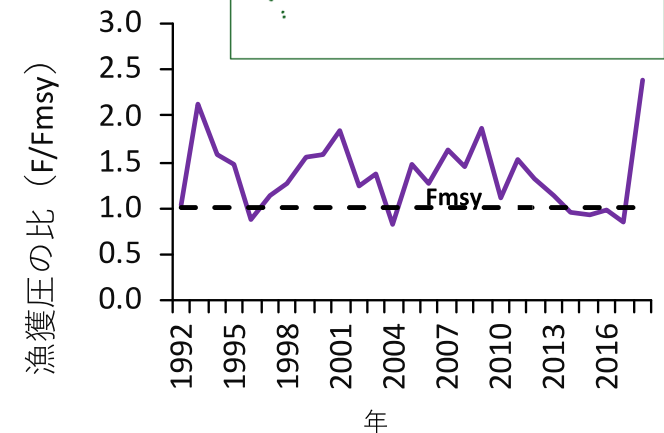
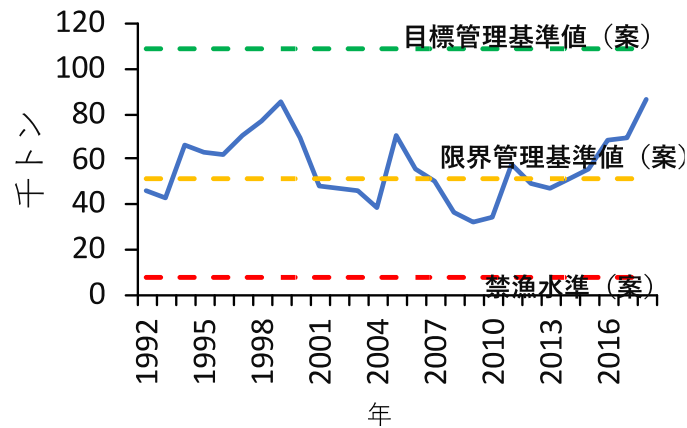
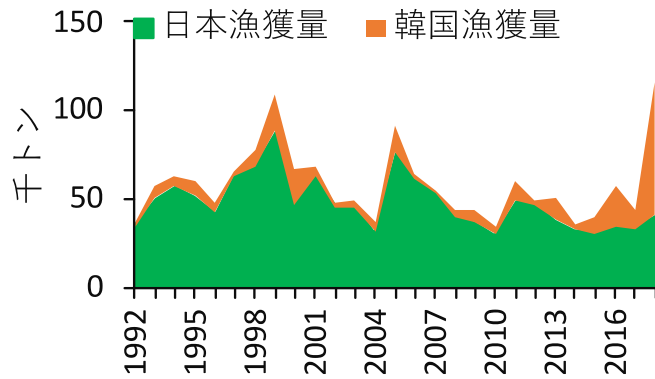


図2 漁獲量の推移

我が国の漁獲量 (緑色) には年変動があるものの、50千トン前後で推移。2018年は前年よりやや増加して41千トン。一方、2018年の韓国の漁獲量は74千トンと急増 (日韓合計115千トン)。

図3 親魚量の推移

親魚量は比較的安定しているが、近年では2014年以降、増加傾向にあり、2018年は87千トン。

図4 漁獲の強さの推移

漁獲圧 (F) は、近年低下傾向にあったが、2018年に急増。

管理基準値、禁漁水準および漁獲管理規則については、7月に開催された資源管理方針に関する検討会 (ステークホルダー会合) に提案したものである。その後の資源評価の更新を反映して本資料を作成した。

ゴマサバ (東シナ海系群) ②

■ 年齢別資源尾数と神戸プロット

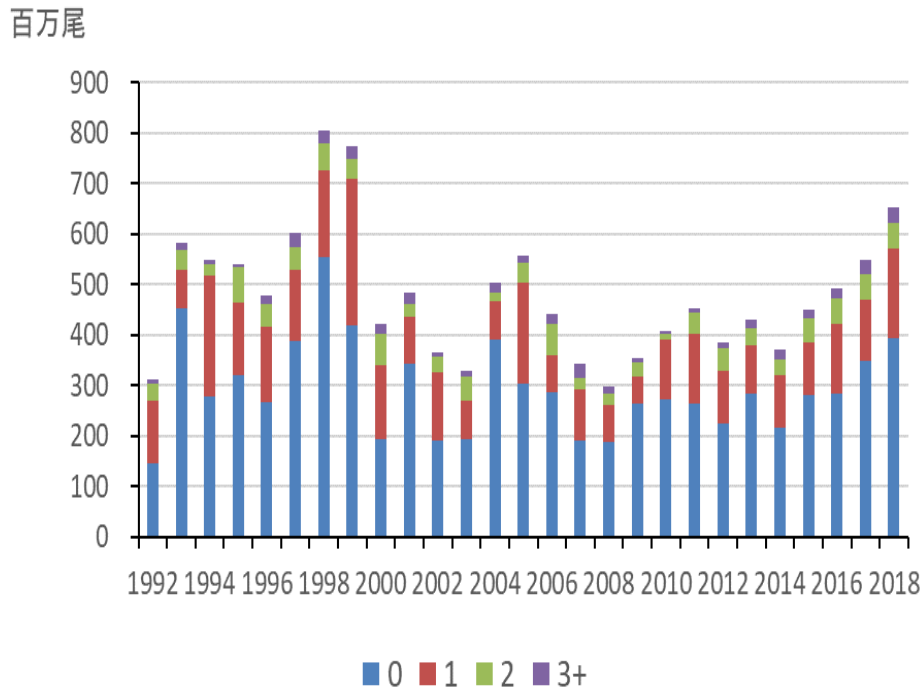


図5 年齢別資源尾数

資源は主に0歳（青）と1歳（赤）で構成される。
近年、資源尾数は増加傾向にある。

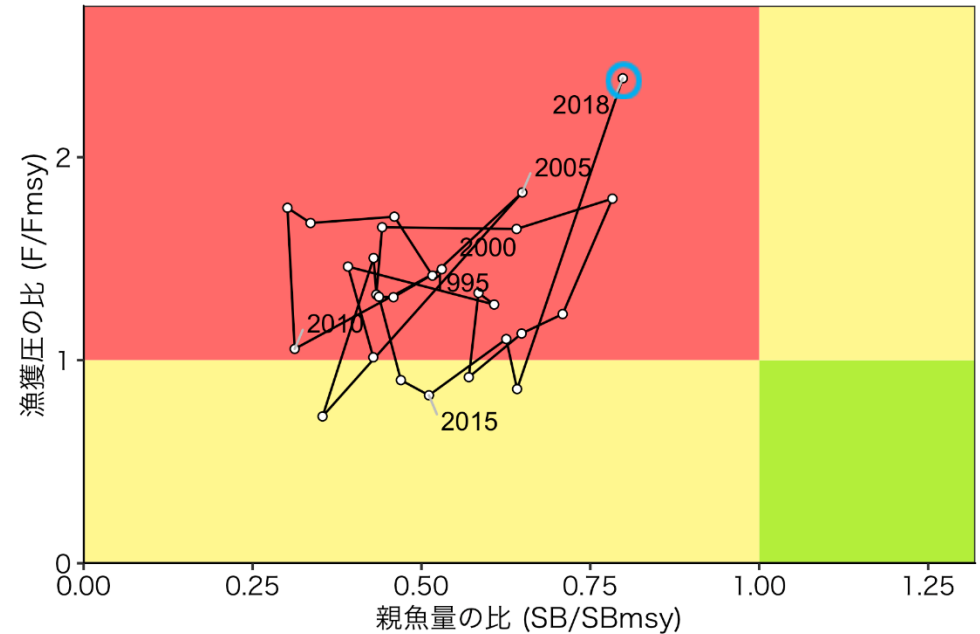


図6 神戸プロット (神戸チャート)

漁獲圧 (F) は1992年以降、多くの年で最大持続生産量を実現する漁獲圧 (Fmsy) を上回っている。親魚量は、全ての年において最大持続生産量を実現する親魚量 (SBmsy) を下回っている。

ゴマサバ (東シナ海系群) ③

■ 管理基準値案と漁獲管理規則案等

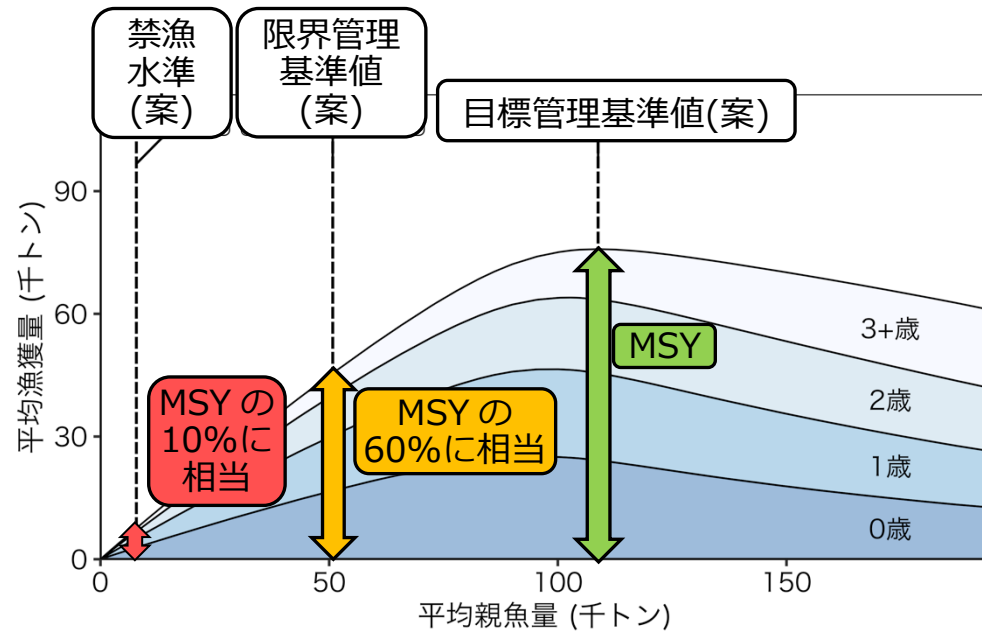


図7 MSYと管理基準値案の関係

本系群の目標管理基準値としては最大持続生産量 (MSY: 76千トン) が得られる親魚量 (SBmsy) を、限界管理基準値としては MSY の 60% の漁獲量 が得られる親魚量を、禁漁水準としては MSY の 10% の漁獲量 が得られる親魚量を提案する。

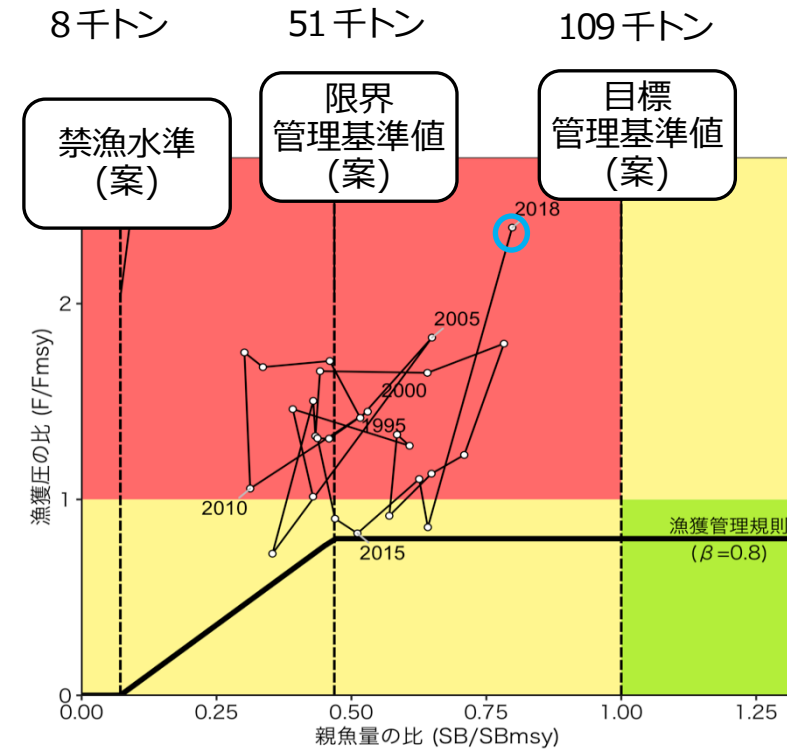


図8 漁獲管理規則案

2018年の親魚量は、目標管理基準値案を下回るが、限界管理基準値案は上回っている。βを0.8とした場合の漁獲管理規則案(※)を黒い太線で示す。2018年のプロット(点)は黒い太線よりも上側に位置するため、2018年のFは当該漁獲管理規則案に基づくFを上回っている。

※βや漁獲管理規則案については「検討結果の読み方」を参照

ゴマサバ (東シナ海系群) ④

■ 将来の親魚量と漁獲量の予測

漁獲管理規則案（現状の漁獲圧は参考）に基づいて算出

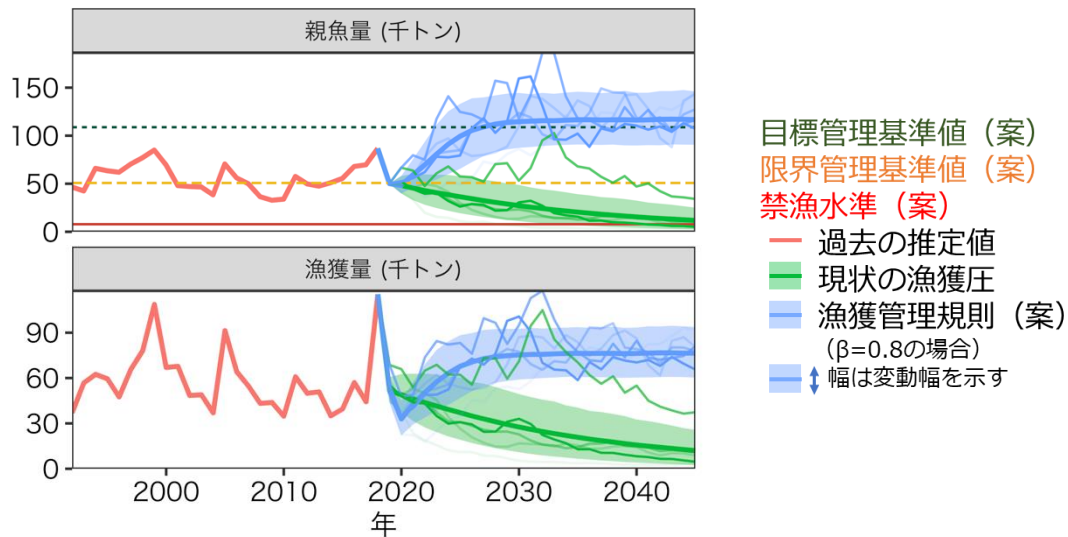


図9 親魚量と漁獲量の将来予測

漁獲管理規則案に基づく、親魚量と漁獲量は2020年まで一旦減少するが、その後は平均的には増加した後、横ばい傾向を示す。

β が0.9以下であれば、10年後に目標管理基準値案を50%以上の確率で上回る(表)。

また、 β が1以下であれば、限界管理基準値案以上の親魚量が維持される。

表 管理基準値案を上回る確率と2020年の漁獲量

β	10年後(2030年)に親魚量が限界管理基準値(案)を上回る確率(%)	10年後(2030年)に親魚量が目標管理基準値(案)を上回る確率(%)	2020年の漁獲量(千トン)
1	99%	43%	35
0.9	100%	67%	32
0.8	100%	85%	29
0.7	100%	96%	26
0.6	100%	99%	23
0.5	100%	100%	19
0.4	100%	100%	16
0.3	100%	100%	12
0.2	100%	100%	8
0.1	100%	100%	4
0	100%	100%	0

※ この漁獲量は日本および韓国の合計値である。

シミュレーションによる確率や将来の漁獲量は、今後も資源評価結果によりアップデートされます。

管理基準値、禁漁水準および漁獲管理規則については、7月に開催された資源管理方針に関する検討会(ステークホルダー会合)に提案したものである。その後の資源評価の更新を反映して本資料を作成した。